

2014年4月27日 主日礼拝

説教 天地創造

創世記1章 26-31 節

【創世記1章】

今年は6月8日がペンテコステ。その次の主日は「三位一体の主日」と呼ばれ、聖公会では創世記1章が読まれます。ある聖公会の司祭によれば、その理由は「三位一体というのは何よりも、父なる神が、子なる神を私たちに与え、聖霊なる神が、この大きな愛を私たちに分らせてくださるとのこと。だから三位一体の主日に、天地創造のみ言葉を読むことは、とてもふさわしい。なぜなら、天地創造の神さまが、私たちが愛する神さまであることを、明らかにするから」です。

【愛の物語】

「一年12回で聖書を読む会」のテキストの第一章は、「天地創造」。神さまの愛を創世記から聴き取ることがねらいとしています。「初めに、神が天と地を創造した」(1)にも愛のみ声が響きます。神さまは何も必要とされないお方。ご自分の役に立てるためではなく、愛するために被造物を造りました。創造の動機は愛。天地創造は「愛からの創造」と呼ぶことがふさわしいのです。

【夜と霧】

精神科医フランクルは「夜と霧」で、極限

状況で生きるには生きる目的が必要だと言います。私たちには目的がすでにあります。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」(31)とあります。造られたばかりで、まだ何一つ良いことをしていない人間、まだ一言のことも口にすることさえしていない人間を、神さまは非常に喜んでくださいました。私たちも神さまの喜び。私たちは存在しているだけで、神さまに喜ばれている。神さまに愛されること。それが私たちの目的、それはもう実現しているのです。

私たちも私たちの家族も、神さまの喜びです。自分なんか、何の値打ちもないんだ、だれの役にも立っていない、そんなことを考えるのは間違っています。なぜなら神さまは、役に立つとか立たないとか、そんなことは関係なく、私たちが喜んでくださっているからです。

レーナ・マリヤさんの有名な言葉があります。「一番危険なのは、自分をあわれむ気持ちに陥ることだと思います」。自分をあわれむならば、人を愛することができなくなる。そして、何より、神さまを見失ってしまう。でもどうしたら、自分をあわれまないで、いられるのでしょうか。それは、私たちは神さまに喜ばれているからです。非常に喜ばれているからです。

【力と愛の神さま】

天地創造では、神さまが「〇〇あれ」とおっしゃると、そのとおりになります。つまり、神さまのお考えの中にしかないもの、それまでは存在しなかったものが、何もないところからできる。これはすさまじい力。これ以上の力はなく、これ以上の愛もないお方が、私たちの神さまなのです。そして私たちが愛することに全能の力を注いで下さるのです。

【聖霊によって】

「非常に良い」はずの世界にも地震や津波があります。けれども、神さまの愛はそうしたできごとの中にも、注がれています。人は極限の状況の中でも、愛を注ぎだして生きることができるのです。それは、私たちが神に造られた「非常によい」存在であるから。神さまが私たちに愛を注いで、「非常に良い」存在として行動させてくださるからです。

復活の主イエスは、弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言われました。非常に良かった世界も私たちも損なわれてしまいました。けれども、主イエスが注いでくださる聖霊によって、傑作が姿を現すのです。それぞれがおかれている場所で、神さまの喜びであるたがいを喜び合うことが出来るのです。天地の創造と聖霊による新しい創造。二つの創造に現れた神さまの素晴らしい愛を今日もほめたたえましょう。